

Executive Order No. 11110

Presidential Executive Order 10289, Amend

Certain Functions Affecting the Department

By virtue of the authority vested in me, I he

United States Code

Section 1: Executive Order 10289 of September

(a) by adding at the end of paragraph 1 there

(j) by amending paragraph 6 of section 43

(31 U.S.C. 821(b)) to provide for the issuance

Treasury bills.

which shall be used for the redemption

and for the minting of standard silver dollar

(b) by repealing subparagraphs (b) and (c) o

made by this Executive Order shall not affe

to this Executive Order, or any appeal or civ

liability shall continue and may be enforced

John F. Kennedy

White House

リ・コンストラクション

第三部

第十八章

Gold standard

峯村 明

リ・コンストラクション

[登場人物](#)

[18・Gold standard](#)

[196.](#)

[197.](#)

[198.](#)

[199.](#)

[200.](#)

[201.](#)

[あとがき](#)

[奥付](#)

登場人物

桧山 健	27歳の実業家
A. V. ラウレンスⅢ	H&L財団代表
アランデル・アウレア	ポルタアウレア公国の現大公
エドミール	〃 皇太子

196.

ポルタアウレア公国は三方を山が囲み、一方は海に面した小国。三方の山の向こうは他国だ。

歴史的に複雑な背景を持つこの地において、アウレア家は千年も前からここで暮らしていた。鉄鉱石、銅、それから、家名の由来であるわずかながらの、金。この地下資源は周辺諸侯の食指を動かす。古来、この地を手に入れようとする物理的企ては幾度となく行われたが、どういうわけか、実を結んだ試しがない。差し向けられた軍隊を疫病が襲ったり、軍隊が留守をしている本国を逆に狙われたり、政変が起こったりする。だいたい、襲おうとしたほうがこっぴどい目に遭っている。そんな例が幾度も重なり、アウレア家の領地は鬼門と化した。アウレア家に手を出すと災いが降りかかるというわけである。

岩山と海だけという、天然の要害のような領地。アドリア海を有する風光明媚な景観は近年になって近隣国の、生活に余裕のある人々を招き寄せた。地下に鉄鋼とわずかに金鉱という資源を持っていたために、国民はそこそこ、潤っていた。

この地域に地震などめったに起きたことはなかったのだが、セーラムの治世に国土が真っ二つに裂かれるほどの大地震に見舞われた。ところが被害を調べるうちに、意外なことがわかった。地層が大きくずれ、わずかだと思われていた金鉱が、大規模な鉱脈の一端にすぎないと、つまり、ポルタアウレアは文字通り黄金への門だったのだ――

「それはまた、父上」エドミールは目を細めた憮然とした顔で、乾いた声で言った。「初耳のような気がします。わが国土内に大規模な金鉱脈があるなどと――」

「私が説明しましょう、エドミール」、とラウレンス氏。「セーラム様は皇太子時代、ご自身の国土の地下資源に興味を持たれた。それで知見を広めようとヨーロッパの学校に留学され私の先祖と出

会われたのです。先祖は幾度かこの地を訪れ、実施調査をしました。その際にわかったのですが、ここポルタアウレアの金鉱の金は非常に……」

金鉱石とは、1トンの岩石中に5グラム以上の金が含まれている岩石のことをいう。一般には2グラム以上で採算がとれる。セーラムとラウレンス教授が調査したポルタアウレアの金鉱は、岩石1トンあたり、なんと60グラム以上という含有量¹だったのだ。

「だから、わずかな量でも人口五千の国を潤すのに十分だったのです。しかしそれはほんの入り口にすぎなかった。一般に採算がとれるとされるラインの、三十倍以上も上回っていたからです。

それを入り口とする大鉱脈の本体とでもいうべきものが国土の下に埋まっている。そのことについて、考えなければならない。私の祖、ラウレンス教授と正太郎はセーラム様より調査を依頼されました。金鉱の発見によって何が起こったか。今の時代のようにインターネットなどなかった時代、彼らは世界各地へ資料を求めました――」

ラウレンス氏は指先でメガネを押し上げた。

¹ 現在、世界最高品位とされる日本の菱刈鉱山の金鉱脈は1トンの鉱石中に40グラムの金を含む

197.

「金鉱が発見されたことによって何が起こったか。多数の人が急激にある地域に集まります。そこはほぼ無人の、未開拓の地です。突然、人口が爆発的に増え、小さな開拓地は巨大都市へと発展する。ゴールド・ラッシュという現象です。

近世、世界はゴールド・ラッシュを幾度か経験しています。

金鉱発見の順番からすると、ブラジル・マットグロッソの金鉱が18世紀始め²、続いてカリフォルニア、オーストラリアのビクトリア州、ニュージーランドのオタゴ地方、チリのティエラ=デル=フエゴ、南アフリカのウィットウォーターズランド、カナダ・クロンダイク地方、などなど、いずれも19世紀中ごろに集中しています。

なかでもよく知られたカリフォルニアのゴールド・ラッシュを見てみましょう。

金鉱が発見された1848年、カリフォルニアはメキシコの一部で、アメリカ-メキシコ戦争の結果、アメリカ軍の占領下にあり、金発見から十日後に調印された条約でアメリカに割譲されました。地元の住民はメキシコの規則、アメリカの原則および個人的な指図という混乱状態、違う言い方をすれば、無法地帯だったのです。

トラブルが多発します。地元の製材所で雇っていた労働者は金を探すために去っていき、不法侵入者が農場から家畜や穀物を盗みました。入植者がやってくる前から住んでいた現地人は人間扱いされず、排除され、飢餓に苦しみ、虐殺的攻撃の犠牲になりました。さまざまな権利の主張、訴訟、暴力沙汰、殺人事件で地域は混乱しました。

当初、金は採り放題で、免許料も無く、議会が出来るまでは税金も無かった。探鉱者は自分たちで法律を設定し、執行しました。

やがて州議会ができると、外国人坑夫に高い税金を課す法律ができ、アメリカ人探鉱者は特にラテンアメリカ系やアジア系の坑夫に組織的な攻撃を始めました。

この時期の探鉱従事者の死亡率や犯罪率は著しく高く、金の回収操作から生じた砂利、沈泥および毒性のある化学薬品が魚類の生息域を汚染し、破壊しました。

² 『[original text #512](#)』の手稿512はこの頃書かれた。

回収された金は、まず地元の食料・物資購入、住居費用に充てられた。これらは慎重に重さを量った金で支払われ、国外から来ていた者は、船に積み込み、故郷へ持って帰った。

ゴールドラッシュは世界中の経済も刺激した。チリ、オーストラリア、ハワイの農家は、探鉱者の食料に巨大な新市場を見出だした。イギリスで生産される製品は需要が大きかった。これらの商品に対して大量のカリフォルニア金が代金として支払われ、世界中で物価を上昇させ、投資を刺激し、雇用を創出しました。

サンフランシスコ造幣局が建設され、金塊は公式のアメリカ合衆国金貨に鋳直された。また、国定銀行に送られて、それと交換に得られたアメリカ合衆国の紙幣が好況のカリフォルニア経済界で使用されました。

この18世紀から19世紀という時期、ブラジルはポルトガルの植民地でしたし、カリフォルニアもビクトリア州も、オタゴ地方もまだ日の浅い開拓地だった。入植者もまだ少なく、森林を切り拓いて製材所を作ろうとしていた者、農場を作ろうとしていた者、そういった人たちがたまたま見つけた金が、法的な整備がされていない土地へ人を呼び寄せ、地域は爆発的に変わりました。

鉱床の所有権、採掘の許可や免許、税金の問題はカリフォルニアに限らず、いずれの地域でもかならず起きています。

採掘者同士の紛争、採掘者と警察、あるいは政府との武力衝突など、さまざまな混乱があり、改革が行われ解決された問題もあれば、この時期に発生した人種差別問題はオーストラリアにおいてはのちの白豪主義政策（白人最優先主義とそれに基づく非白人への排除政策）の基礎となったのです。

カリフォルニアから8,000万ドルに相当する金がフランス人探鉱者や商人によってフランスに送られたという推計があり、1850年代にオーストラリアからイギリスに輸出された金はイギリスの対外債務の全額を返済し、18世紀後半のイギリスの大規模な商業拡大の基礎を築くのに役立ちました。

大都市の建設や鉄道など交通網の整備を始めとした国家財政の一時的な豊かさと、少数の私的財産の形成に要約されました。

さて、以上のことを踏まえて、ポルタアウレアに立ってみます。

人口五千、面積はバチカン市国に次ぐ広さ、国土の七割は山岳地帯。永世中立国、単一民族、歴史は古く、法は整っている。金鉱は当国のものと歴然としている。

このような条件の場所にかつてのゴールド・ラッシュのような事態が起こるとはちょっと考えられませんが……」

「整っている法に手をつけるという手があるな」、とエドミールはぽつりとつぶやく。「狭いと言っても金鉱すべてをカバーするのは難しいだろう。山岳地帯を超える、海岸線から上陸する、観光客を装う、こっそり入り込む方法はいくらでもありそうだ」

それからため息をついた。「まいったな。こんな心配をせにゃならんとは。しかし、セーラム存命中に発覚したのだろう？ それを今まで表に出さなかったとは、父上……」

「うむ。ラウレンス教授らの調査によって、我が国の金鉱の存在を公表したとして、過去のゴールド・ラッシュの折に起こった様々な事象が、ほとんど当てはまらないだろうということがわかった。いや。想像ができないだけで、むしろ、ただでは済まないだろう」

アランデルはしばらく間をおいてから続けた。

「当時、公表できなかったわけがある。時はあたかも、1929年という年だった」

健はアランデルの視線を感じた。

——きみにはわかるはずだ——

無言の問いかけとともに。

「まさか——世界恐慌——」

199.

1929年10月24日、ニューヨーク株式市場で株価が一斉に大暴落。以後2カ月間で、株価は平均42%というとんでもない急落ぶりだった。当時アメリカの過剰投資は国内外の広い範囲に及んでいたので、株価暴落による不況は世界中に連鎖した。企業の倒産、工場の閉鎖が相次ぎ、失業者は激増した、というのが世界恐慌のおおよそのあらましである。

その前提として第一次世界大戦(1914-1918)がある。

資本主義列強による植民地や勢力圏拡大を目指す膨張政策、すなわち、帝国主義の思惑が交差し、オーストリア＝ハンガリー帝国の皇位継承者がサラエボで暗殺された事件が火をつけた。ヨーロッパを主戦場とし、同盟国(ドイツ・オーストリア・オスマントルコ・ブルガリア) 対 連合国(フランス・イギリス・ロシアほか九ヶ国)を始めとして、関連する国家が次々と戦闘に加わった。通常の兵士だけでなく一般市民も徴兵され、死者・負傷者・行方不明者合わせて三千七百万人超という多大な犠牲を生んだ。ヨーロッパに大きな傷跡を残した戦争である。

戦後、敗戦国ドイツは莫大な賠償金を抱えて、アメリカに莫大な借金を負い、アメリカ資本は西ヨーロッパ復興をはじめとして、国内外に大量に投資、株価や地価が実態からかけ離れて値上がりし、国内では生産過剰の状態に陥っていた。見かけだけの好況、いわゆる「バブル経済」である。

そして1929年10月。バブルが崩壊する時がやって来たのだった。

アランデルは言う。

「問題は、第一次世界大戦中に金本位制が中断し、世界恐慌を皮切りに、すべての国が金本位制を離脱したことだ」

金本位制とは一言で言って、紙幣の価値＝金の価値である。この紙幣を兌換紙幣（だかんしへい）といい、正貨との引き換えを国が保証している。兌換紙幣と金はイコール、紙の印刷物を現物の金が裏付けていた。

第一次大戦中、各国間で兌換紙幣の輸送ができなくなったことと、世界最大の貨幣の両替市場であったロンドンが爆撃により活動を停止したのを機に、金本位制は維持できなくなり、廃止された。そして各国は不換紙幣（ふかんしへい）へと移行する。

不換紙幣とは金貨や銀貨といった正貨と引き換えが保障されていない法定紙幣をいい、金や銀の裏付けがなくても自由にいくらでも発行できるもので、価値を決めるのは国の信用の有無だけである。

今現在、主流となっている不換紙幣は自由に発行できるが、価値を裏付けるものがないのだ。

＊

「正太郎とラウレンス教授がポルタアウレアの地下に莫大な金が埋まっていると知ったのは、世界の金本位制が廃止された時でした。よりによってなぜこんな時に、というタイミングだったのですよ。健、もしあなたがその場に居合わせたとしたら、どうしますか」

この状況で、この状況というのは世界に恐慌の嵐が吹き荒れ、金本位制は廃止されたときのこととて、実は金が大量にあるとわかったら……

健は腕組みして唸った。「世界的に金本位制が廃止された以上、発行する紙幣に金の裏付けは必要ないが……価値保存手段として、外貨準備として、多くの国の中央銀行が金を保有している。けれども。単純に考えて、金の価値は大暴落……」

「ええ。おそらく。ほかには？」

「工業用や宝飾品としての需要はあるはずだな。ということは……」

しぶい顔で唸り、腕組みを解いて両手の指を髪に突っ込む。

「ポルタアウレアにとってどうかというんだろう？ さっきの先生の講義からしても、いいことはあんまりないような気がするんだが……」

「きみは経済学者なんだろう？ はっきりしたまえ」

「関係ない！ 架空の話には答えられんと言ってるだけだ。まあ、オレだったら誰にも言わずに黙ってるかな」

「架空の話とはなんだ！ 聞いてなかったのか！ じっさい、ポルタアウレアにとって死活問題なんだぞ！！」

「まあまあ。ふたりとも。しかしエドミール、あなたの言う通り。ポルタアウレアの金鉱は諸刃の刃となるでしょう。かつて世界恐慌の真っ只中でこの件が発覚した時、桧山正太郎は言いました。『この問題に手をつけてはならない』『少なくとも今のところは』、と」

200.

「健。正太郎は、まさに、黙っている、そういう決断をしたのですよ」

「……………」

「と、言うより、セーラム様を決断させたのは正太郎のその考えだったんです。

彼は言ったそうです。『なにか意図を感じる』、と。『世界の経済が金の裏付けのない、言ってみれば数字だけのものへ移行していく巨大なうねりの渦中で、ポルタアウレアが莫大な金を保有していると発覚したことにはなにか理由がある。当面はなにもしない方がいい。のちに問題になったと

しても、戦後の混乱、金融の混乱の真っ只中でもある。"なにもしなかった"ことにはいくらでも理由
はつけられます。今は貴国の金鉱に手をつける時ではないでしょう』、とね。

セーラム様はその進言を受け、金鉱の開発に関しては今後大公自身が判断するものとされました。それで間違いありませんね？」

ラウレンス氏は現大公を見、現大公はうなづいた。

「しかし、さすがの正太郎も不換紙幣の体制がその後延々と続くとは思ってもみなかったようです。『"その時"が来たら、いくらでも力になる』とセーラム様に約束したそうなのですが.....結局、
正太郎の代、セーラム様の代に、"その時"は来なかったということなんですよ。

....."その時"が来ない、そのことが、H&L設立へとつながったわけです。不換紙幣の体制、すな
わち"数字の経済"の継続は、なにかにコントロールされているからではないだろうか、と、正太郎は
そう考えていた」

健は目まいと既視感を同時に味わった。

『人は生きることのあらゆる側面に数字があることを当然と思い、常識であるにとらえ、不思議に
思っていない』

『数字によって人間は自由を、魂が生きる自由を奪われた』

『この世界が何者かに支配されていることに気がついたのは、桧山正太郎氏だ』

あれは夢ではなかったのだ。

201.

「さて」、と現大公アランデルは咳払いする。

「地震によって思いがけなくも見つかった新しい金鉱については、当時の大公セーラムの判断でその事実は伏せられた。それは主にセーラムの私的ブレーンの進言によるものだった。しかし彼らだけが知っていたわけではない。関係省庁が絡んでいて、当然緘口令が敷かれた。

そして……財務省の人間が正太郎に目をつけた。ありていに言って、東洋人正太郎は外国のスパイではないかと疑われたのだ。セーラムは経済に関する正太郎のセンスと人柄ゆえに、彼を重用していた。それがかえって疑いを招いてしまった。政府の関係者に疑われるのはひじょうにまずい。下手をしたら正太郎は闇に葬られてしまう。コトが金に関するだけにその可能性は否定できなかった。

だからセーラムは正太郎を遠ざけた。正太郎と絹子の間を取り持った立場もあった。すでに身の危険を感じていた正太郎はセーラムの意を受けた。

双方の同意の上で二人は関係を絶った。

正太郎は二度とポルタアウレアの地を踏むことなく、広大なオーストラリアの中へ身を隠したのだ」

健は言葉もなく大公を眺めた。曾祖父正太郎はこの国の一大問題に関わってしまっていたのだ。すると、「健」、と声をかけられた。「唐突ですが、ちょっと私の話を聞いてもらえますか。五、六年前、私はアメリカを旅行し、ダラスという町に立ち寄りました。その時のことです」

思わずラウレンス氏を見る。五、六年前、健もダラスを訪れている。ほかでもない、ラウレンス氏を追っての旅だった。結局ラウレンス氏には会えずにその足で日本へ渡ったのだったが。

「百年前、ポルタアウレアの地で私たちの先祖が立ち会ったおおよそのことを知ってはいました。アメリカ旅行中にそのことを思い出しているときに、ダラスへ行ってみようと思い立ったのです。なぜダラスなのかと不思議に思いましたが、とにかく行ってみました。

飛行機を降り、軽く何か食べようと入った店で、ひとりの若い男性と知り合いました。私は、肩書はいろいろありますが、ベルギーから来た歴史学者だと自己紹介し、彼は……ボブという名にしておきましょう……ボブはライターで、ドキュメンタリー映画のシナリオを練っているのだと言いました。

「どんなドキュメンタリー？」と私は尋ねた。世間話の流れというやつで、なんの気なしに訊いたのです。

「ケネディだよ」とボブは言いました。「J.F.ケネディ。彼はダラスで死んだ。知ってるだろ？」

「ああ、とても有名で、謎めいて、興味の尽きない事件だよね」

ボブはケネディの死についてまったく新しい観点からの映像作品を模索しているんだと、私相手に熱心に語ってくれました。そしてボブが一番描きたいのはこれだという。

それは「1963年6月4日、ケネディは米国財務省に対し、国の銀準備を担保として40億ドルの紙幣発行を承認したんだ³。つまり……」

健は思わず口をはさんだ。「つまり、金本位制を導入しようとした、と！？」

「そのとおりです。ケネディの死に関して切り口はいくつもある、けれども、ボブはそれを焦点にしたいのだと言っていました。ケネディはそのためにわずか五か月後の同年11月、撃たれたのだと。

ボブとはアドレスを交換したんですがね、その後連絡がとれません。あれから六年経ちますけどドキュメンタリー映画が完成したという話も聞きません」

「……………」

3

大統領行政命令 第11110号（第十八章・表紙に使った英文書の和訳）

大統領行政命令第10289修正案、財務省に影響のある、一定の機能の履行に関する修正
私に与えられた権限によって、合衆国条例3項301条について、以下の通り命令する。

第一条 修正される1951年9月19日の大統領令第10289は、これによりさらに修正される。

(a) その段落1の終わりで以下の副段落(j)を付加する:

(j) 1933年5月12日の条例43節段落(b)について、大統領権限により、(31 U.S.C.821(b)と改正されました。

そして、どんな銀地金に対する銀証券、銀、または財務省証券の銀本位制ドルに対しても政府証券を発行するように。

その際、どのような発行済の銀証券の兌換(償却)のためにもこれが用いられないこと。

そして、当該銀証券の額面金額を定めて、その償却のための標準銀ドルと補助銀貨幣を鑄造するため。

(b) それ段落2の副段落(b)と(c)を破棄(無効にする)することによって、

第二条 この大統領令によってされた修正は、この大統領命令以前の、どのような施行された法令、またはどのような生じる権利または生じた権利、または控訴あるいは民事・刑事上の訴訟手続きが行われたものについては影響を与えることはない。しかし前述の法的責任は継続するものとします。そして、あたかも前述の修正が為されていないよう執行されるかもかもしれません。

J. F. ケネディ
ホワイトハウス
1963年6月4日

「だから健、私は思ったんです。先々代大公セーラムと桧山正太郎が袂を分かったのはやはり正解だったのだ、とね」

18・「Gold standard」

19・「」へ続く

あとがき

この辺はまったく色気のない話でして。書いててしんどいんだから読むほうだってしんどいでしょう？ ということで短めに切り上げました。まだ書かにならんことがいくらかありそうだけど、ひとまずこのくらいにしとませう。なんだかやけに暑いですし。

あ、これは書いておこう。シナリオライターのボブさんの話、『ケネディは米国財務省に対し、国の銀準備を担保として40億ドルの紙幣発行を承認した』の何が問題かと言うと…ポイントはふたつあるのです。

ひとつは『国の銀準備を担保として40億ドルの紙幣発行』、もうひとつは、『米国財務省に対し』。前者は金本位制を意味します。問題は後者、現在アメリカにおいて紙幣を発行しているのは米国財務省ではありません。米連邦準備制度理事会＝FRB、いわゆる中央銀行です。

ボブさんは、「それで彼は暗殺されたんだ」と衝撃的なことを言っているわけですが、うちの物語には関係ないので誰も言及していません。

2025年6月21日 記

奥付

リ・コンストラクション

第十八章 Gold standard

2025年 6月21日初版発行

著者

峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材

[イラストAC](#)

制作

Puboo

発行所

デザインエッグ株式会社